

# 小学校第3学年におけるリコーダー導入期の試案

## ——意欲の高まりと学習定着の観点から——

南 谷 悠 子

**摘要：**本稿は、小学校第3学年音楽科の授業でのソプラノリコーダー導入期における音楽指導法を、児童の学習意欲の高まり及び学習定着の観点から捉え直したものである。児童の感想から読み取れたことは、1年間リコーダーを学習してきた中で、リコーダーの学習が印象に残ったという点であった。リコーダー体操やテナーリコーダーの使用、スモールステップでの取り組みを柱とした実践は、児童の学習意欲の高まりや学習定着に一定の有用性があったと考えられた。わが国では、中学校段階も合わせると、多くの児童が7年間リコーダーを学習することになる。そのため、小学校段階で基礎的な奏法を身につける必要性を、今回の省察によって再確認した。今後の課題として、限られた時間の中で児童がリコーダーへの学習意欲を高め、学習が積み上がるような創意工夫をどのように行っていくのか、授業計画のあり方も含め検討していくことにある。

**キーワード：**リコーダー 音楽指導法 意欲の高まり 学習定着

## I. 研究の背景

### 1. A県公立中学校音楽科の授業において

筆者はA県公立中学校にて講師として勤務し、第2学年においてアルトリコーダーの授業を展開していた。その机間指導の中、1名の男子生徒が、左手が上になるべきところ、右手が上の構え方になっている。「あれ、左利き？」と声をかけると、「はい」と答えた。「小学校のとき、「左手が上だよ」と先生に言われなかったですか」と筆者が聞くと、「はい」とのことであった。また、第2学年の別のクラスでアルトリコーダーの机間指導を行ったが、1名の女子生徒が、やはり右手が上の構え方になっている。左利きであり、特に直すよう言われなかったと主張していた。2名の生徒に共通していたことは、左ききであるということと、左手を上にするような指導はなされなかったらしいということであった。

## 2. 問題の所在

小学校第3学年において、児童は初めてソプラノリコーダー（以下、リコーダーと略記）という楽器に出会う。わが国では、小学校第3学年から第6学年までの4年間と、中学校第1学年から第3学年までの3年間、合わせて7年間リコーダーを使用するため、表現領域の器楽活動においてリコーダーは重要な位置を占めていると言える。そのため、児童がリコーダーを楽しいと感じ、学習意欲を保てるかどうかは重要な問題である。

中学校に勤める以前に勤務していたN市公立小学校では、全児童が左手を上リコーダーを構えて演奏することができていた。しかし、中学校段階で右手が上になっている生徒と出会った。そもそも、リコーダーはなぜ左手を上リ構えることになっているのだろうか。右手を上リ構えても問題はないのではないか。

西田（2009）は、「よく「左利きの子どもは左手が下になるのか」という質問を受けるが、そのような配慮は必要ない。特別の理由がない限り左手が上という原則を導入期にこそ身につけさせなければならない。」と述べている。リコーダーの足部管は、右手小指で押さえやすくする前提で少し右に傾けるように、中部管に取り付けるのが一般的である（図1）。それは、中部管の一番下の指孔と足部管の指孔（ソプラノリコーダーでは、レとドの音）が、ダブルホールになっているためである。ダブルホールの各孔の大きさは、リコーダーの構造上、違う（図2）。レ#やド#、ソ#の音（図3）を出すためには、指をずらしてダブルホールの右側の孔を押さえる必要がある。そのため、構え方を左手が上、右手を下にするのが自然であり、右手が上になる構え方には問題があると考えられる。もし、レ#やド#、ソ#の音を出す場合、左手でダブルホールの左側の孔を飛び越して右側の孔を押さえなければならないため、正しい音程を出せなくなる可能性がある。このことで、リコーダーの基礎的奏法が習得されず、リコーダー学習に対する意欲が低下してしまうおそれがある。

そのため、児童の学習意欲を損なわぬように、そして、学習内容がしっかり積み上がっていくように、教師が導入段階でつまづかないことを肝心と捉え、指導する必要がある。なお、リコーダー導入期とは、広義の意味では第3学年の1年間、狭義の意味では第3学年1学期と捉えられるが、本稿では後者と定義し、過去の実践を考察する。

## II. N市公立小学校第3学年における導入期の実践

### 1. 実践の概要

N市立H小学校は、各学年2クラスずつの標準規模校である。講師として音楽科を担当した。その中で、リコーダー導入期の指導は、児童にとって初めての作音楽器であり、今後の音楽観を左右するものであると捉え、特に丁寧に行った。児童が「リコーダーと仲良しになる」ことをねらいとした導入期の実践である。なお、リコーダーはジャーマン式である。

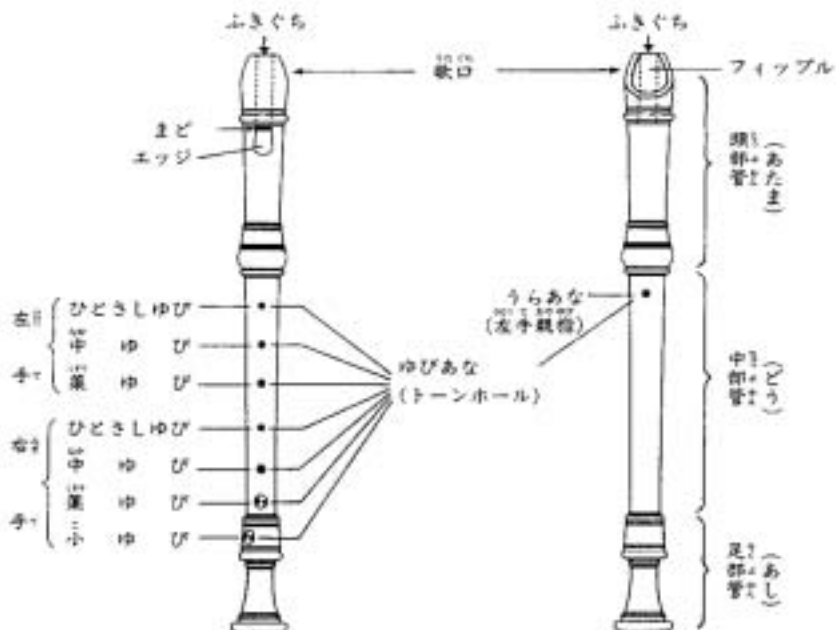


図1 リコーダー各部の名称 出典：田中吉徳（1995）『導入期におけるリコーダーの指導法』  
全音楽譜出版社 p. 10



図2 ダブルホール指孔



図3 下#の運指

## 2. リコーダー指導の実際

### (1) 姿勢・構え方について

とかく導入期の児童は運指を気にしがちである。指でしっかりと孔が押さえられているかを見ようと猫背になってしまう児童や、反対に、リコーダーの下部を持ち上げるようにして常に目で運指を確認しようとする児童が見られた。これでは、自由にのびのびと、そして表現意欲を持って演奏することへとつながらないので、姿勢・構え方については、毎時間確認を行った。背筋は伸びているか、足は少し開いて床に足裏全体がついているか、前かがみになっていないか、ひじを体から少し離しているか、肩や首に力が入っていないか。また、児童が目で見て確認することができるよう、黒板によい姿勢の拡大図(図4)を掲示した。

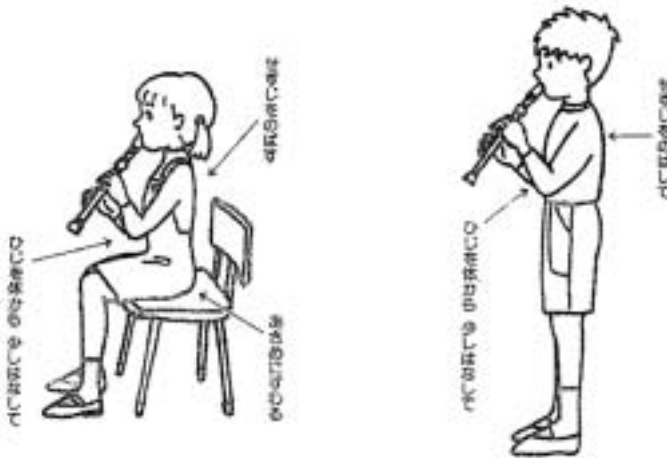


図4 よい姿勢 出典：田中吉徳（1995）『導入期におけるリコーダーの指導法』全音楽譜出版社 p. 16

構え方は、左手が上になるようにすることも含まれる。まだ構え方に慣れていない頃は、右手が上になるように構えてしまう児童も見られた。そこで筆者が考案した「リコーダー体操」を行った。

「リコーダー体操」とは、無駄な力が入っていないよい姿勢をつくりやすくすること、左手が上になるよう構えること、リラックスして楽しい気分でリコーダーとかかわること、この3点をねらって行った。リコーダー体操を行い、左手が上になるように指導し、3年生は全員、左手が上になるよう構えることができた。

#### リコーダー体操の手順

- ① リコーダーを机に立てる
- ② リコーダー下部を右手で持つ
- ③ 右手で持ったリコーダーを左に倒す
- ④ リコーダー上部を左手で持つ

- ⑤ リコーダーを持ったまま、ストレッチのように体を倒す  
「まえ～まえ～、うしろ～うしろ～、みぎ～みぎ～、ひだり～ひだり～」  
「そのままかまえて～」
- ⑥ そのまま構えると、左手が上になる  
「はい、できた」

右手の問題もある。左手しか使わない（シ・ラ・ソ）の段階においては、慣れるまで右手は足部管を軽く持ってもらったようにした。慣れてきたら右手の親指で支えるよう指導した。

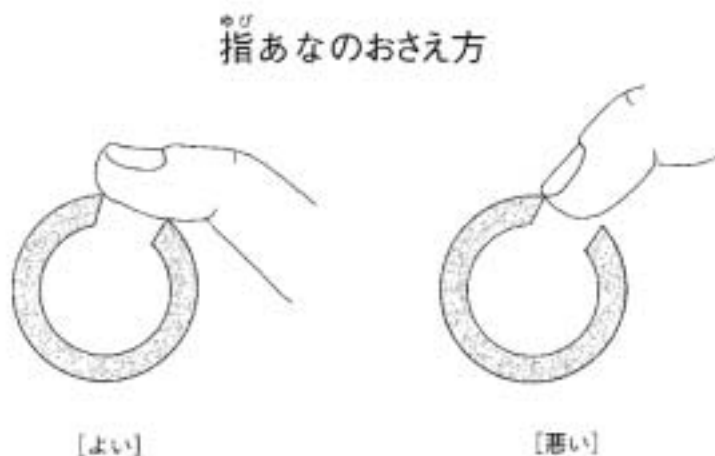


図5 指孔の押さえ方 出典：ヤマハ（2011）『はじめてのソプラノリコーダー』p.2

## （2）運指について

指孔の押さえ方については、児童が目で見確認することができるよう、黒板によい例と悪い例の拡大図（図5）を掲示した。指孔は指の腹で、手や指に力を入れずに押させることを指導した。作音楽器の理解と関連するが、指孔が完全にふさがっていないと、そこから息がもれてしまい、正しい音の高さにならないことを理解できるよう手本を見せた。また、息を吹き込まずに指で孔を軽くたたいてみることも取り入れた。「シ」の音であったら、左手親指の裏孔は押さえておき、左手人差し指でうまくたたけると「シ」の音の高さで「ボン」「ボン」と音がする。これは、指の腹で押さえるという感覚をつかむのに効果があるように思われた。

また、どの高さの音から学ぶかという問題がある。音楽科の教科書は、左手の運指について、「シ→ラ→ソ→高いド→高いレ」という順序で学ぶことになっている。筆者も、「シ」から始めることにし、「シ→ラ→ソ→高いド→高いレ」という教科書通りの順序で指導を行った。

初回の授業では、「シ」のみにとどめ、「シ」のみでも豊かなハーモニーの伴奏がついた楽曲を演奏し、「できた！」という喜びや達成感を持ってもらえるよう工夫した。習得する音が、「シ→ラ→ソ」と進んでいく中で、北村（1993）の楽曲は、限られた音でも豊かなハーモニーの伴奏に

よって、児童のリコーダーへの意欲の高まりや、達成感を得られやすいと思われた。限られた音に意識が集中するため、タンギングについても習得しやすくなる利点があると思われた。

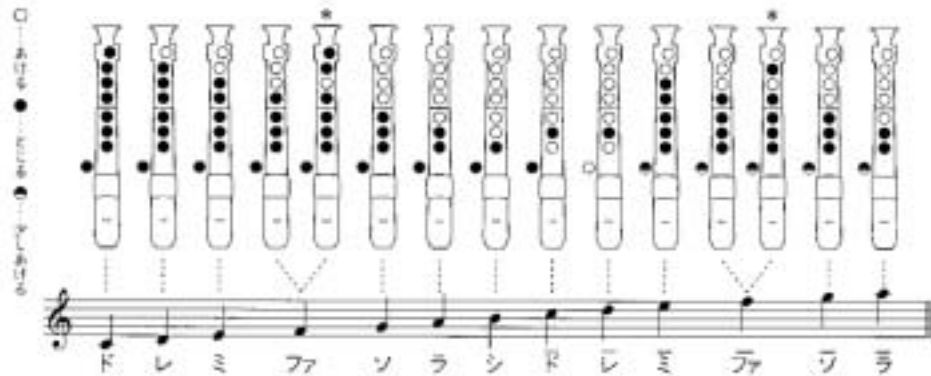


図6 運指表 出典：小原光一ら (2016)『小学生の音楽3』教育芸術社 p.70 \*はバロック式

宮部 (2005) は、導入期のつまずきは指づかいであると述べている。運指について、「シ→ラ→ソ」と進む中で、ソのあたりから運指がうまくいかない児童が出始め、「高いド及び高いレ」では、やはり運指に混乱している児童が見られた。黒板には、運指の拡大図 (図6) を用い、筆者が前で手本を示しても、運指に戸惑う児童らに対して、あまり効果があったとは言えなかった。畑田 (1982) と三国 (2008) は、テナーリコーダーを薦めている。そこで、ソプラノリコーダーの1オクターブ下の音が出るテナーリコーダー (図7) を教師用として使用することにした。

教師がテナーリコーダーを使用する利点を2点挙げる。

- ① 指孔と指孔との間隔が広く、児童が教師の運指を目視しやすい
- ② 全員で演奏するとき、1オクターブ低音が出るので、教師の音がよく聞こえる

以上の点が利点と言える。教師がソプラノリコーダーで手本を示すよりは、テナーリコーダーを使った方が、児童からは運指が見やすくなる。そして、全員で演奏するときは、教師もソプラノリコーダーを吹いてしまうと、児童と教師の音は区別がつか



図7 左からソプラノ・アルト・テナー

ない。そこで、1オクターブ下の音が出るテナーリコーダーを用いて吹くと、朗々とよく響き、教師の音をはっきりと聞こえるのである。目で運指の確認をし、耳で音が同じかを判断できるため、児童が安心感を持って授業を受け、演奏できた喜びや達成感を持つことへとつながりやすいのではないかと思われた。なお、リコーダーには指番号がついているが、鍵盤ハーモニカの指番号と混同すると思われたため、あえて用いなかった。

### (3) タンギングについて

タンギングは、低学年で鍵盤ハーモニカを扱った際に習得済みの技術である。鍵盤ハーモニカでは、タンギングをしながら鍵盤を押せば音が鳴ったのに対し、リコーダーになると、途端に混乱してしまう児童が見られた。それは、指孔をきちんとふさがなければ正しい音程にならないため、運指に意識が行き過ぎてしまうためであると思われた。そこで、新しい楽曲を演奏する際は、スモールステップで進め、タンギングを習得した後、表現意欲を持ちながら演奏することへとつながるように導いた。

#### 楽曲を演奏する際のステップ

- ① ドレミで歌い、曲想をつかむ
- ② ドレミで歌いながら、運指をする
- ③ タンギング唱（有声音）をしながら、運指をする
- ④ タンギング唱（無声音）をしながら、運指をする
- ⑤ 楽曲を演奏する

このような手順をふむことにより、タンギングが上手く出来ずに「フーフー」となっていた児童が、基本のタンギングである「トゥートゥー」ができるようになっていった。いきなり楽曲を演奏するのではなく、少しずつ小さな目標を達成していき、最終的に楽曲を演奏できるよう、指導のステップをなだらかにしたやり方は有用性があるように考えられた。

### (4) 音色について

自分の出している音は美しい音色か、正しい音程かを演奏しながら「聴く」ということが大切だと思われる。「演奏しながら、自分の音をよく聴こう」と指導した。また、音色は息圧と切り離して考えることは難しいと思われた。よく見られたのは、息を強く吹きすぎてしまい「ピー」と美しくない音を出してしまう児童である。3年生の児童にとっては少しやさしい息づかいにするとちょうどよいと感じられた。そして、一定の息圧で吹くという感覚もつかみづらいであった。息が強すぎたり弱すぎたりしないように、わかりやすい例え（息が弱い→オバケ）を取り入れたり、視覚構造化して理解できるよう試みた。

さらに、音色は曲想とも切り離して考えることは難しい。どんな感じがするかを、楽曲を演奏する際のステップ①「ドレミで歌い、曲想をつかむ」の段階で感じ取ってもらい、表題を手がかりに児童と一緒に考えた。児童の発想はユニークであったが、多様性を認めながらも、なるべく全員が納得できるような曲の解釈を目指して指導した。

### (5) 作音楽器の理解・楽器の手入れについて

リコーダーは、自分で孔を押さえ、音程を作り出す楽器だということや、息の量で音程が変わることへの気づきを得ることで、学習意欲の高まりを期待したい。初回の授業では、遊び感覚で自由に吹いてもらい、楽器調べを行った。作音楽器であることへの気づきを得ている児童も見られ、関心の高まりが感じられる児童もいる一方、初めての楽器に戸惑う児童も見られた。初回に覚える音は「シ」のみにとどめることで、運指と共に作音楽器への理解も深まると考えられた。

また、楽器の手入れについてであるが、リコーダーは多くの児童が中学校も含めて7年間使用するものであり、手入れの方法を知っておくことも大切である。個人が手にする楽器としては、リコーダーが最後になる者もいるだろう。リコーダーを大切にすることは、音楽を愛好する心情を育てることにつながると考えられる。やわらかいハンカチやガーゼで水滴を取っておくことを初回の授業の終わりに教師と一緒にやった。

2,3学期についても、1学期で行った上記の実践を土台に、時々リコーダー体操を取り入れ、教師はテナーリコーダーを使用し、新しい楽曲を学習する際には、スモールステップで取り組んだ。また、右手の運指を習得し、レパートリーも増えた。アンサンブルでは表現意欲を持ち、皆で演奏することを味わいながら、楽しそうに演奏する姿が見られた。

## Ⅲ. 児童の感想

3月の最終授業の際、3年生43名から感想のプレゼントがあった。絵と文章による自由記述の表現であり、裏面まで使用されているものもあった。筆者が児童の感想を一文にし、筆者へのねぎらい（ありがとうございます）や児童の報告（がんばります）を除き、カテゴリー分けを行った（表1）。

表1 児童の感想から読みとれたこと

絵	リコーダーが描いてある 26名
文章	リコーダーが楽しかった、上手になった、印象に残った 32名
	音楽及び授業が楽しかった、嬉しかった、面白かった 26名
	音楽が好きになった、音楽の楽しさがわかった 9名

\*重複回答あり



#### IV. 分析

表1からは、リコーダーの学習について肯定的な記述が多く見られた。音楽の授業について肯定的な記述もあったが、「リコーダー」と「音楽」及び「授業」を比較すると、「音楽」及び「授業」と書いてある肯定的な記述よりも、「リコーダー」と楽器名を書いてある肯定的な記述の方が多し点に着目したい。もちろん、「リコーダー」と書いてあれば「音楽」及び「授業」の中にも含まれると考えられるが、あえて「リコーダー」と記述してある。また、絵にソプラノリコーダーとテナーリコーダーを描いてくれた児童、「リコーダー体操がたのしかった」と感想を寄せてくれた児童もいた。小学校第3学年から初めてリコーダーと出会い、学習が始まることも理由であろうが、1年間を振り返ったとき、様々な学習内容の中でリコーダーの学習が印象に残った児童が多かったことがわかった。

#### V. 考察とまとめ

3年生の自由記述の感想からは、初めてリコーダーと出会い、個人差はありながらも概ねリコーダーが楽しい学習であったと推察された。リコーダー体操、テナーリコーダーの使用、スモールステップでの取り組みを指導の柱とした実践であったが、他の様々な指導や環境の相乗効果も相まって、児童の学習は積み上がったと考えられた。リコーダーが楽しいと感じ、好きになること。その気持ちが、「もっと吹きたい」という意欲につながると考えられる。リコーダー体操は心身をリラックスさせ、児童が笑顔になる体操であった。リコーダーが楽しいと感じるきっかけの一つになったと思われる。そして、全員が左手を上にしてリコーダーを構えられたことは、リコーダー体操という「体験」を「経験化する」試みが実を結んだと考える。また、学習が定着しやすいように、児童が目と耳で運指や音を確認できるテナーリコーダーを使用し、新しい曲を学習するときは、スモールステップで行い、既習曲から新しい曲へと段差なくつながるような工夫も試みた。3年生で習う運指を、全員が習得できたことは、テナーリコーダーの使用とスモールステップでの取り組みが有用であったと考えられる。そして、学習意欲と学習定着は切り離せるものではなく、学習意欲の高まりが学習定着へとつながっているとも思われる。音楽の授業以外にも、休み時間に3年生の教室からリコーダーの音がよく聞こえてきた。「もっと吹きたい」という意欲が、音楽の授業以外にもリコーダーを吹くことにつながり、学習定着の一助になったと思われる。

実践について残された課題もある。ジャーマン式とバロック式の問題である。ソプラノリコーダーのみ、運指が容易なジャーマン式が用いられることが多いため、中学校でバロック式であるアルトリコーダーの学習が始まった際に、混乱を招いている。また、テナーリコーダーもバロック式であるために、筆者は「ファ」の音の運指はするが吹かないでいた。このやり方でよかった

のかを再考する必要がある。そして、ピッチの問題である。聴く力を育てるため、音合わせを取り入れたいが、時間がかかるため数回しか行うことができなかった。今後どのように行ったらよいか検討したい。

限られた時間の中で、学習意欲の高まりと学習定着を図るために、教師は柔軟な実践力を持ち、創意工夫して授業を行わなければならない。それには、学習が開き、深まるような教材、そして児童ひとりひとりの学習状況の把握を手がかりとした授業計画も大切である。そして、リコーダーの活動を通して、豊かな情操を養っているという点を大切にしたい。

先行研究では、指導後の効果まで検証されているものは少ない。今回、対象者全員が左手を上にしてリコーダーを構え、運指を習得できた点と、多くの児童からリコーダーに対する肯定的な感想が得られたことは、筆者の取り組みは一定の効果があったと考えられた。さらに、従来の方法と比較検討することで、リコーダー体操、テナーリコーダーの使用、スモールステップの導入の有用性が明らかになると考えられる。今後もリコーダーの指導法について実践を行い、学習意欲の高まりと学習定着について研究する予定である。

#### 【引用・参考文献】

- (1)西田治 苦手意識を抱かせない器楽導入の在り方-離島小規模小学校における実践を通して-長崎大学教育実践総合センター紀要、2009、8、pp.133-146
- (2)田中吉徳 導入期におけるリコーダーの指導法、全音楽譜出版社、1995、p.10
- (3)同上 p.16
- (4)はじめてのソプラノリコーダー、ヤマハ、2011、p.2
- (5)宮部和男 小学校におけるリコーダー指導のあり方-導入期の指導を中心に-岐阜聖徳学園大学教育学部教育実践科学研究センター紀要、2005、5、pp.81-90
- (6)北村俊彦 子どものためのリコーダー曲集 笛星人、トヤマ出版、1993
- (7)小原光一ほか13名 小学生の音楽3、教育芸術社、2016、p.70
- (8)畑田兼吉 先生と子どものためのリコーダー教室、全音楽譜出版社、1982、p.41
- (9)三国和子 やさしいリコーダー指導のコツと練習曲、学事出版、2008、p.83

(名古屋経営短期大学子ども学科 講師)